

2008年7月15日
第177号

題字 住谷悦治



燎原社
(京都の民主運動史を語る会)

代表 岩井忠熊

事務局

京都市左京区高野東開町1-23

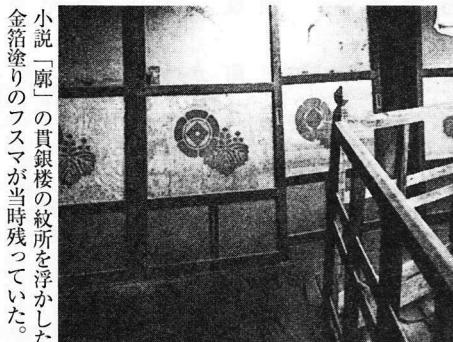
第三住宅33-302 井手幸喜

〒606-8107

tel & fax 075 (722) 3823

総会報告／例会案内	12	「京大学生結核研究会事件」の真相を求めて	家野 貞夫
BOOK 川合葉子／編集後記	9	連載 ミレー書房とともに歩んで 南龍男さんに聞く（下）	岩井 忠熊
連載 忘れ得ぬ人 倉岡愛穂さん	8	戦前期立命館学園と左翼運動	小谷正一郎
	10 6 4 2		

小説「廓」の貫銀楼の紋所を浮かした
金箔塗りのフスマが当時残っていた。



【連載】

この一枚

「廓」のあった場所

伏見・中書島 西口克己氏の住まい

1959



子どもと散歩する西口氏。右手前ガラス格子の家が西口氏の家だった。

1959年の「毎日グラフ」の「ご家庭参上」ページに作家・西口克己が取り上げられている。
京都伏見の中書島といえば、その昔、三十石舟が淀川にそつて、大阪の八軒屋までを往来していたところからの宿場で、廓の町。昨年四月、売春防止法が成立して以来、町は変わったとはいながら、一歩をこの中に踏み込めば、すぐそれと知れる町並みがひろがっている。

女郎屋の息子が、その手で女郎屋の内幕を小説にした、というので話題をまたいた「廓」の作者西口克己氏の住いは、この廓町のど真ん中にある。小説の主人公「貫太」が開いた当時の店そのままだが、いまは下宿業。さらに五十年たつて、現在は当時の面影はほとんど消えたが、「廓の町から学生の町へ」と活動を始め、市会議員に当選も果たしたばかりの頃の写真である。

9月13、14日、伏見・呉竹文化センター
で「廓」が上演されます。

執筆者紹介

家野貞夫（いえの・さだお）

元府学連委員長・共産党府委員・京都民報社長を歴任。伏見区在住。

南龍男（みなみ・たつお）
元ミレー外販大宮書店店長・宇治市在住。

岩井忠熊（いわい・ただくま）

本会代表。立命館大学名誉教授。右京区在住。

川合葉子（かわい・ようこ）
原子物理研究者。原爆展掘り起こしの会。京都市

京丹後市在住。

小谷正一郎

北区在住。

原爆展掘り起こしの会。京都市

「京大学生結核研究会事件」の真相を求めて

家野 貞夫



得ることが出来た。

二〇〇六年秋、「京大学生治安維持法違反事件」（一九四一年）で検挙された戦没学生・永田和生を記録した児玉健次元衆院議員の『聞こえますか命の叫び』（かもがわブックレット）

の出版を祝う会が京都でもたれた。私も京大の出身者、学生運動経験者の一人として、戦前・戦中からの京大の反戦自由の伝統、先人の苦闘を発掘、顕彰していくことの重要性を痛感した。

そうした矢先に、『燎原』に連載された岩井忠熊先生の『滝川事件以後十五年戦争期京大学生運動の断章』で「京大学生結核研究会事件」のことを知った。「一五年戦争期最後の学生事件」「四二年九月に医学部学生が検挙され、翌年にはすでに陸海軍の軍医であつた人たちまでが軍法会議に付された」太平洋戦争開始後も京大に学生の「抵抗運動」があつたのかと驚くとともに、もっと調べてみたいの思いが募った。

を中心に若干の点を簡潔に述べたい。

医学部・結核研究会の活動とそれへの弾圧は、『開戦前夜の京大医学の調査活動』そこで昭和女工哀史をみ

た』が関係者の手で一九八二年に『復刻版』として発行され概要がほぼ明らかになつてある。結核研が福井県勝山町（今の勝山市）で行つた結核調査のまとめ作業および『復刻版』発行にも

中心的役割を果たされた金森熙隆氏（写真）には、島根県斐川町のご自宅でお話を聞くことができ、資料も提供していただいた。また、金森氏と同じ時に検挙された斎藤幸氏（当時農学部学生）が北九州市で健在であること

がわかつた。九歳という高齢のため、直接お話しすることは出来なかつたが、福岡と熊本の治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟の方々のご協力で氏の自伝的著書を読むことができた。

岡田良夫氏（当時同志社大講師。故人）のご遺族からもお話を聞くことができた。ご協力頂いた関係者のみなさん、そしてアドバイスを頂いた岩井先生に

は軍籍離脱となり、仲居は降等で一兵卒（衛生二等兵）として召集された。金森、斎藤はともに懲役三年・執行猶予五年の判決を受けた。藤本の量刑はわからなかつた。なお、軍法会議に付された六名のうち、桂大典が「戦死配置」（生きては生還できないと思われる配置）につけられて戦死したのをはじめ、小田直行、仲居庸夫も戦（病）死した。（この項敬称略）。

今回の調査で弾圧の全容がほぼ明らかとなつた。「治安維持法違反」の検挙者は八名。四二年九月、繰り上げ卒業となつた金森熙隆、藤本常彦ら四名の医学部学生、および斎藤幸、岸本艶夫、岸谷四郎（経済学部学生）が検挙され、さらに翌年の二月には岡田良夫、岸谷四郎（経済学部学生）が追加検挙された。また、四一年一二月繰り上げ卒業し陸海軍医となつていた仲居庸夫、津田安ら六名が軍法会議にかけられ、治安維持法違反で取調べを受けた。こうして合計一四名が検挙された。あるいは軍法会議に付された。仲居、津田

燎原 第177号（2008年7月15日）



金森熙隆氏

事件から六十数年が経過し、関係者・犠牲者も殆どの方が故人となり、ご健在の方も九〇歳を超えておられる。色々困難はあつたが、多くの方々のご協力で、新たな「証言」や資料を

受け、今回あらたに明らかになつたこと

デッチ上げといふしかない。特高のデッチ上げのひどさは、後述する医学部以外の方々の弾圧「理由」にも共通している。

斎藤・岡田・岸谷氏、岸本さんのこと

この「事件」では、医学部以外に四名の弾圧犠牲者がいる。これまで不明な点も多かつたが、今回の調査で新しい事実もわかつてきた。

斎藤幸氏

戦後、熊本、福岡で衆議院選挙にも立候補

日本共産党中央委員、同顧問を歴任された。一九九二年に『私は歩いた』を自費出版されて藤氏が京大卒業式の日に「反戦主義者」という理由で検挙、一年九ヶ月留置されたことなどを知ることができた。森、藤本氏とともに松江高校ファシズム研究会に参加しており、それが特高から眼をつけられ、「事件」の「中心メンバ」に祭り上げられたものと思

われる。

岸谷四郎氏

特高は検挙理由を、

「(金森、藤本、斎藤氏らが)卒業に当たり後継者として承諾させる」として

いるが、金森氏は、「岸谷君の検挙は初めて知った。卒業する時に、『後に残る君たちががんばってくれ』の話はしたかもしれないが、組織だったものでは全くない。特高は何でも格好をつけたが」とおっしゃっておられた。

なお、岸谷氏は戦後大阪の帝国データバンク労組役員として活躍され、また日本共産党永年党員として、二〇〇二年に解放運動戦士の碑に合祀されているが、治安維持法弾圧の件については

大阪では知られていないようである。

岡田良夫氏 戦後京大教養部教授

(政治学)として学生の人気も高かつた。私も受講し単位を取った。後に知

事候補となられた川口是氏の京大への

招聘に尽力されたことでも知られる。

岡田先生のご遺族からは、「検挙後一ヶ月後に釈放。同大講師の職を失い苦労した」などのお話を聞いた。特高資料にある岡田氏の検挙「理由」は荒唐無稽なもの(「右翼革命を通じて日本の共産主義革命を行つことを学生たちと協議」!!)であり、またご遺族や金森氏のお話からも、「事件」に至る岡田氏と京大の学生たちとの接点は見いだせなかつた。「岡田氏と京大學生とはその裏付けもとれず、わずか一ヶ月で釈放せざるをえなかつたのではない

か?」これが私の疑問である。

岸本艶さん 検挙者中唯一の女

性である。これまで特高資料以外その名前は出てこなかつた。しかし、金森

氏が岸本さんのこと覚えておられ、「勝山調査のまとめを手伝つてくれた。

丸顔で顔立ちの整つた方だった」と証

言された。何人かの女性とともに、ベ

ーベル『婦人論』の輪読会に参加して

おられたようで、特高はそれを「左翼

思想の啓蒙・宣伝」としているが、こ

の書は、発禁本でもなんでもなく、当

時改造文庫から山川菊枝訳で出版さ

れ、古典的名著として広く読まれてい

たものである。なお、岸本さんについ

ては、その後の消息を含めてそれ以上

のことはわからなかつた。

先人の先駆的な活動・苦闘を顕彰し受け継ぐ

軍法会議で起訴され、軍籍離脱とな

った津田安氏は、「復刻版」・「結核研

究会結成当時の回想と見解」の中で、

「日支事変勃発に引き続き、日独伊防共

協定まで締結して行くという時流の中

にあって、当時、最も判然としていた

ものは、反ファシシズム傾向であり、ど

の学生の頭の中にもファシズムに抵抗

する思想の底流があつた事は否めな

い」「戦争は結核の発生を助長し、結

核はまた、戦争遂行からは邪魔者扱さ

れる、という悲劇的矛盾に対する若者

らしい抵抗」と述べられた。一九四〇

年代、戦争と軍国主義に反対する組織

的な「抵抗運動」は事実上根絶やしにされてきたが、学問と社会へ真剣に向

き合う学生達の心情と活動は決して絶えることはなかつた。それを支配層・特高がもつとも恐れ治安維持法違反事

件にデッチ上げたのだ。しかしこれら

の方々はその弾圧に屈することなく、

むしろそれを教訓に、戦後、医療の分

野はもちろん、平和・労働・選挙など

理事も歴任されている。紙数の関係で

お一人お一人詳しく述べ難いが、学

達の先駆的な努力、活動を顕彰し、学

び、受け継いでいきたいと思う。

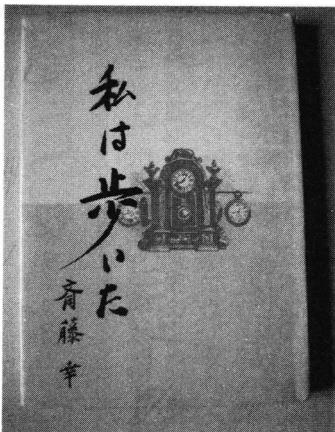
[参考文献]

▽「滝川事件以後十五年戦争期 京大學生運動の断章(五)」(岩井忠熊。『燎原』第一七三号)。▽「開戦前夜の京大医学

生の調査活動 そこで昭和女工袁史をみた」(復刻版編集委員会。一九八二年)。

▽「15年戦争下の京都大学医学生の結核調査活動の報告 治安維持法による彈

究会」事件のこと」(岡本康。『革新京都の先駆者たち』所収。二〇〇八年)。▽「私は歩いた」(編集・発行 斎藤幸。一九九二年)。



斎藤幸氏の著書

3 燐原 第177号 (2008年7月15日)

ミレー書房とともに歩んで

下



南龍男さんに聞く――

借金取りが押し掛け手形を切る

その頃、全国の民主書店に本を卸して「全販（全国出版販売株式会社）」が倒産しました。六全協の前後の時期は党もどん底で、民主書店も全国的につぶれていきました。京都は残っていましたけれども、4店が1つになり、負債も各店舗30～40万円ずつを合わせて100万以上ありました。そこへ全販がつぶれたので、借金取りがミレー書房に押し掛け、2～3日泊まり込みで、とにかく「100万円の手形を切れ」と迫られて、月3万、30枚以上の手形を切らされました。

当時の責任者は井上圭一さんと富永徳二郎さん。この2人で100万円の手形を切って、東京から取り立てに来た全販の人々に渡した。ところが、その後2～3ヵ月後、井上圭一さんが病気で入院、富永さんも「やめさせてくれ」と言つて、やめていった。結局、残ったのは私と居川道明と途中で辞めた若い子だけ。それで私が経営責任者となりました。

それと、蛸薬師の家主の岡田清さん

が、「豆腐屋では食つていけないから、もう豆腐屋はやめる」と言い出して、隣の「大栄堂」が「店を全部貸してほしい。軒先のミレーも立ち退いて」と

言つてきました。4店のうち現金がいちばん入るのは蛸薬師の店だから、そこを放り出されたらミレーそのものが傾いてしまう。それで、「ここはひとつ株式会社を設立して、ミレー書房が主体になって、岡田さんが豆腐屋をやめても生活できる店にしよう」ということになりました。

当初、80万円の資金を募集したけれど、1株1000円だからなかなか難しい。なんとか40万円を集めて、株式会社ミレー書房を1956年4月28日に設立、5月1日メーデーに開店させました。この時点で六全協は終わっていて、全販がつぶれたのはその後です。100万円の借金は新会社が払うことになりました。

新会社社長に津司市議、私が専務に

新会社の体制は、社長に津司市太郎さん（医師で共産党的市会議員）、専務は井上圭一さん（この人の息子が南

区の井上健二市議）。取締役に富永徳二郎さん、加藤憲夫さんは、岡田さんも決意してくれましたが、問

私たちちは「この際、岡田さんに専務になつてもらうしかない」と決めて、岡田さんも決意してくれましたが、問

屋の大阪屋から担保の提供を求められ就任を断りました。それで私がやることになつて、国民金融公庫から20万円の融資を受け、私の家にあつた20万と合わせて、大阪屋に手土産代わりに40万円の現金を持って、専務就任の挨拶に行きました。

1957年1月の「営業中間報告書」によると、雑誌「世界」100部、「思想」60部以上を扱うようになり、「京都書籍業界の中でも注目」されてきたとしています。ちなみに55年春には『経済学教科書』を旧ミレー書房で

1年生なども婦人部で取り上げてくれて、全組合員に注文書を渡してくれました。この頃は子どもの教育に熱心な若い世代が多く、毎月200部ほどの学年誌を売り上げました。さらに百科事典も全専売だけで何百セットも

売されました。全10巻ぐらいの小型の百科事典ですが、「子どもにいい」ということになつたのでしょうか。それまでには『前衛』などを1冊ずつ配達していましたが、まったくケタ違いに売上げが伸びて、大阪屋の支店長もびっくりして挨拶に来ました。

「外販」を分離・独立、「ミレー鴨川書房」開店

そうしているうちに蛸薬師のミレーに10年目の期限が近づいて来ました。

全専売支部の注文に助けられ

とすのがとても苦しい状態でした。給料は30000～60000円。でも、党は六全協で新しい体制になつて、どんどん打つて出るにつれ、店の売上げも上がつてきました。外販も、雑誌の配達だけでは大変でしたが、その頃、

「井上清著『日本女性史』（三一新書）を使って学習会をしませんか」と女性の納品が決まりました。

家の賃貸は、口約束では「無期限」でしたが、契約書では「10年後には更新する」となっていました。岡田さんの奥さんがその契約書を見て、「10年目まであと何年。その時には出てもらいたい」と言い出したんです。というのも、あの辺りの地価や家賃がケタ違いに高くなっています。私たちに世間に並みの家賃が払えるはずもない。すつたもんだの挙げ句、「3年間待つてくれ」ということになりました。

ところが、3年なんてあつという間に来る。店の売上げは順調に伸びていきました。それで、岡田さんに社長になつてくれと頼みました。岡田さんは「店売りだけやる。外販は独立して別にやつてくれ」と言い出したので、仕方なく1969年に、株式会社ミレー書房と株式会社ミレー書房外販部の2つに分れました。

それまで外販は、府庁西側の小野喜三郎先生の持ち家を安く借りて、事務所にしていました。しかし、独立することになると店舗を持つ必要があるので、そこで、河原町丸太町東入の路地を入つたところにミレー鴨川書房を開店、そこで3~4年営業しました。

外販は、蛸薬師の店がある時から取り組んでいました。名称は「外販部」で、規模もどんどん大きくなつていきました。最も大きかつたのは全車売で、教組などの労働組合にも納品していました。そうしているうちに、学校・保育関係を中心に、百科事典など高額な

セット販売が外販の主体になっていきました。学校関係は、教職員互助組合の加盟店に入つて、給料から天引きしてもらえる条件ができました。ラッキーだったのは、運動の上げ潮の時期だったこと。本を買おうという人は、朝9時から始まる集会でも、開会前からリュックを背負つて来ていましたね。そういう人が何人かいました。丹後など過疎地にいる先生たちは、ふだん本が買えないんです。

やっぱり本屋は、運転資金をしつかり持つて、立地のいい場所で、人手のかからない商売をしないとダメですね。われわれも、借金がなかつたら、もつと楽にできます。

ミレー大宮ができた経緯をいうと、店は一条・ヤサカ・大宮にあります。いちばん新しいのは大宮で、1958年ぐらいだったと思います。ヤサカは、今出川通りに面していて、1階がジャスコで上階がマンションという建物の隣に出した店でした。大阪屋の紹介で、あまり権利金も取られなかつたので、入ろうということになつたんです。

書店で歴史が長いのはミレーだけで、内部で論争をしていた時のほうが熱心でした。お互いに理論武装をしないとダメだから、学習にも真剣に取り組む雰囲気があつたんですね。

私は、ミレー4店時代を経験します。私は、ミレー4店時代を経験します。私がミレーに関わったのは、20歳前後から73歳で辞めるまで50年以上です。いつもつぶれそうな借金を抱えたまま、資産など何もない状態でした。

それだけ腹をくくれたのは、「それが使命だ」と党から言われたからだと思います。もし個人でやつていたら、と

うの昔に辞めてしまいました。家族もみんな犠牲になりましたが、「党的仕事だから」ということで腹をくくりました。

そうでなければ、あんな儲からない仕事をできません。

思います。あの時がポイントでしたね。

株屋も読んだ『経済学教科書』

な本もあつて、たとえば『経済学教科書』(三一新書)はよく売れました。

株屋のおっさんも読んでいると言われましたね。もうひとつベストセラー『紅岩』。この時代は他の本もよく売れました。その後、革新系の本で、それほど記録的に売れた本というのではありません。

学習活動が盛んな時代は、本もよく売れました。サークルの先生たちが、いろいろな実践を総括して、本を出していましてね。そういう人たちが退職して現場を離れる、後が続かない。

あの時代の本なんか何の役にも立たない」という現場の先生もいました。

労働組合もまだ2つに分れてなくて、内でも論争をしていた時のほうが熱心でした。お互いに理論武装をしないとダメだから、学習にも真剣に取り組む雰囲気があつたんですね。

書店で歴史が長いのはミレーだけで、内部で論争をしていた時のほうが熱心でした。お互いに理論武装をしないとダメだから、学習にも真剣に取り組む雰囲気があつたんですね。

私は、ミレー4店時代を経験します。私は、ミレー4店時代を経験します。私がミレーに関わったのは、20歳前後から73歳で辞めるまで50年以上です。いつもつぶれそうな借金を抱えたまま、資産など何もない状態でした。

それだけ腹をくくれたのは、「それが使命だ」と党から言われたからだと思います。もし個人でやつていたら、と

うの昔に辞めてしまいました。家族もみんな犠牲になりましたが、「党的仕事だから」ということで腹をくくりました。

そうでなければ、あんな儲からない仕事をできません。

思います。あの時がポイントでしたね。

たぶん大阪屋の借金は約1000万円で、外販部が600万円をかぶり、100%払いきました。

50年余、使命感に支えられて

私は、未成年で党活動を始めて、レッドページに遭いました。夜間高校にも通っていたのですが、病気になつてやめました。でも、党に入つてなれば、組合に残つていたかも知れない。

そうすれば組合の活動はやめていたと思います。あまり先走りすぎたんですね。「本屋だつたら本が読める」と思つて、入つたけれど、「おまえが本を読んでどうするんや。本を読んでも一銭にもならん。そんな暇があつたら売つて来い!」と言われて、とても読め

るような状況ではなかつた。1冊の本を売るのがこんなに大変なのかと思ひました。

私がミレーに関わったのは、20歳前後から73歳で辞めるまで50年以上です。いつもつぶれそうな借金を抱えたまま、資産など何もない状態でした。

それだけ腹をくくれたのは、「それが使命だ」と党から言われたからだと思います。もし個人でやつていたら、と

うの昔に辞めてしまいました。家族もみんな犠牲になりましたが、「党的仕事だから」ということで腹をくくりました。

そうでなければ、あんな儲からない仕事をできません。

思います。あの時がポイントでしたね。

(聞き手=佐々木肇・木村義治)

戦前期立命館学園と左翼運動

岩井忠熊

の獄中生活を受けたことになる。⁽⁴⁾その後も再三にわたり逮捕・投獄され、敗戦ではじめて解放された。戦後に共産党的の京都市議会議員を三期つとめた。

川勝傳は立命社研を組織

「立命館百年史紀要」第16号（2008年3月）に岩井忠熊氏が「戦前期立命館学園と社会運動」と題する論文を寄稿されています。その中の「左翼運動と立命館」の部分を転載させていただきます。（編集部）

第一号は小田美奇穂

司法省の思想研究資料特輯「最近に於ける左翼学生運動」（昭和十六年）によると、左翼運動で司法処分を受けたために学籍を失った学生の立命大の数を、一九三一年に二人、三四年に一人の計三人としている。さらに学校別による検挙ながらに起訴状況統計表では立命大、一九年八人、三二六年六人、三三年四人が検挙者数となっている。いずれも学内資料によつた現れない数字である。

戦前期立命館は右翼だったという先入観の下で、左翼の存在が看過されてきたきらいがある。「立命館百年史」通史一章の叙述は簡略にすぎたので、補足したい。立命館関係者で左翼運動に関与した第一号の人物は、晩年に学校法人理事長だった小田美奇穂（一八九八年—

九七一年）であろう⁽¹⁾。小田は一九二一年専門部法律科を卒業し、翌年に弁護士試験に合格してたちに弁護士活動をはじめた。在学中から印友会（印刷工の労組）の常任理事となり、「日本労働新聞」に寄稿していたという。弁護士になると労働組合や小作人運動にかかわる弁護活動に入つた。二六年に京都無産者教育協会を開設した労働学校では、住谷悦治、林要、谷口善太郎、水谷長三郎、山本宣治らとならんで、法律の講師をつとめた。その後、労農党に入つて政治活動をしたが、二八年二月に離党して弁護士業に専念したとされる。しかし小田は戦時下にあって殴打されて負傷し、その上に府会は津司欠席のまま全会一致で出席停止五日の懲罰を決定した。その後も津司は無産党の活動をつづけ、解散まで社会大衆党員として活躍した。また三五年の共産党多数派事件で鶴淵清虎が西陣署で急死した時には、津司が労働組合全評から派遣された医師として検死し、警察の主張を退けて拷問死を確認して、ついに特高主任の起訴や関係警官の処分まで追いつめられた⁽³⁾。津司は戦後に一たん社会党に入ったが、あらためて共産党に入り、京都市会議員を三期つとめた。しばしば財團法人立命館の評議員もつとめた。

北牧孝三（一九〇〇年—八九年）は枚方市（旧牧野村）の農家に生まれ、弁護士の書生をつとめながら立命館大学専門学校（現京都府立医科大学）に入学し、府立病院に勤務のち開業医となつた。その政治的足跡は、合法無産政党の社会民衆党からしだいに左派に移つていった。立命館関係者で左翼運動に関与した第一号の人物は、晩年に学校法人理事長として三一年一月二七日の府会で、折柄はじまつた満州事変における日本駐

屯軍に対する府会決議にもとづく慰安電報の提案に対し、「帝國主義戦争に絶対反対」と叫んで反対した。採決の結果、八年法経学部経済学科卒。非常勤講師河上肇の講義・著作に感動し、京大にもぐりこんで河上の講義をきいていたといふ。在学中、二十五年に立命館社会科学研究所を組織し、回想で会員は二ヶタほどいたように記憶すると語つた⁽⁵⁾。その時に川勝はあるない経験をしている。同年七月に京大学生集会所でもたれた学生社会科学連合会第二回大会に立命社研の代表として出席した。この参加者の多数が治安維持法適用第一号とされる「学連事件」で捕縛され、野呂栄太郎・岩田義道はじめ三八人が起訴された。川勝は家事の都合で一部にしか出席しなかつたため、検挙をまぬかれた。しかしそのために中川総長により出されて、川勝を指導したと思われた若手教授の四宮恭二、山下英夫とともに手続きらしい注意を受けたが、中川の態度は憎々しいというものではなく、親父が息子にいいきかせるという温かみがあつたといふ。卒業後の経済記者や経済界での川勝の活動の背景にこのような若い時の経験が見え隠れし、後年に財界人として日中友好運動に重要な足跡をの

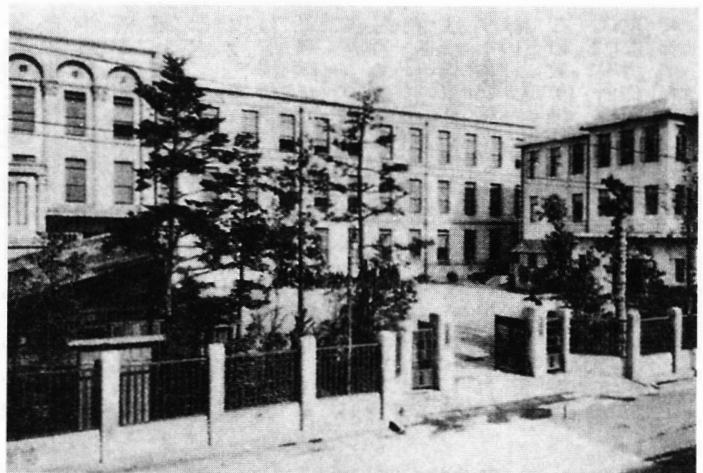
こすにいたった思想的背景としても無視しえないものがある。

田村敬男ら中退組の活動

戦前期の社会運動家には、学業中途におわった人たちが多い。田村敬男（ゆきお）（一九〇四年一八六年）も立命館大専門部法律科三年中退となっている。一九二四年立命館大学社会科学研究会員となつたという⁽⁶⁾。川勝のいう社研創立と年代がくいちがうが、多分、社研の前身だった社会思想研究会への入会と思われる。田村のその後のおもな経歴は、京都俸給者組合書記長、労働農民党京都府支部連合会調査部員をへて、書籍卸小売業京都共生閣を開業し、また出版社政敬書院を経営した。いずれも左翼出版物や進歩的な書物を取り扱つた。末川総長の最初の著作を出版したことを見ても自慢した。若い時の事故で脚に障害のある身で、晚年にまで精力的に活動し、戦後は主として印刷業、晩年はライト・ハウスで老盲者への奉仕活動に従事した。田村の特記すべき活動として、在学中の社研がある。

一九五七年の田村の回想によれば、川勝、千土地の首藤、元京都新聞論説委員の斎藤恒之助、府会事務局長丹羽雅仁と田村らは、前記学連事件弾圧への抗議活動として関西学生自治擁護同盟を組織し、中川総長の厳命をふり切つて学生大会を開いたという。前記社研のメンバーの提唱によるといふ。戦前期立命に他に例のないレジスタンスであった⁽⁷⁾。

田村の社会運動史にのこる有名な活動



1936年頃の立命館大学（広小路）

は、山本宣治暗殺後の労農葬でその遺骸を京都駅にむかえた時である。警察は徹底的に妨害した。田村は労農党員としてかかわり、特にその模様をプロキノに手配して撮影した（フィルム現存）。ことは、獄中にあった。戦後共産党中央委員となつたが、綱領問題で異論をいだき、離党した。とにかく戦前・戦中期の非転向共産主義者の代表的人物の一人である。

出獄後、日中戦争中に共産主義者団結成の中心になり、逮捕後敗戦まで獄中にあった。戦後共産党中央委員となつたが、綱領問題で異論をいだき、離党した。とにかく戦前・戦中期の非転向共産主義者の代表的人物の一人である。

中川総長は『立命館学誌』一六三号

（一九三三年九月一日）で、「本日発表され

た共産党事件の被起訴者に、我専門学部

卒業の武田武治君の名があることを知つて、実に愕然に堪へない云々」（六月二〇日）と述べている。武田は三二年九月に

検挙されていた。活動内容と司法処分の結果については、残念ながら明らかでない。

田村の令嬢陽子（現姓小沼）は、戦後

に末川総長室で秘書役をつとめ、今も彼女を記憶する人はかなりいるであろう。

彼女は父から「先生に何かが起こつたと

き、お前が身代わりになるくらいの覚悟がないと、先生の秘書はつとまらないぞ」と励まされたという⁽⁹⁾。

司法省「思想月報」（昭和一六年一〇月分）のページをくつって、意外な事実に気づいた。共産党中央委員会はじめ組織の潰滅後に、組織の再建を目指して日本共産主義者団を組織し、

一九三八年に検挙された春日庄次郎（一九〇三年一七六年）が、立命館中学四年で中途退学し、上京して印刷工となり、労働運動に入つたという。中学在学中に労農ロシア飢餓救済運動に参加している。モスクワの東洋勤労者大学に学んだのち帰国。三・一五事件で検挙され、満期出獄後、日中戦争中に共産主義者団結成の中心になり、逮捕後敗戦まで獄中にあった。戦後共産党中央委員となつたが、綱領問題で異論をいだき、離党した。とにかく戦前・戦中期の非転向共産主義者の代表的人物の一人である。

七年までつづいた月刊『学生評論』は、いわゆる人民戦線活動として関係者が逮捕・起訴された。その配付網として立命

大にも通信員販売員がいたとされている⁽¹²⁾。なおよく聞いておけばよかつたと思

うが、元総長武篠守一（一九一〇年一七〇〇年）もチラと弾圧経験をもらしたこと

がある。

左翼思想前歴者を受け入れる

以上のような事例を発見するにつれて、筆者は戦前の立命館が太鼓を打鳴らして街頭行進する禁衛隊の学園だったとする

内務省「特高月報」（昭和一〇年三月分）に横川誠一の三四四年三月検挙、三五年三月起訴が出ている。横川は立命館大学専門部法科卒で、警察当局が共産党的外郭団体と見なしたボエウ（日本プロレタリア詩人連盟か？）、コップ（日本プロレタリア文化連盟・東京地方中部中区協議会）での活動が主要な問題とされたらしい⁽¹⁰⁾。司法処分の結果やその後の消息は不明である。

単純な断定に疑問をもついた。勿論、左翼学生は常に少数であり、表に出なかつた。それは当時の大学高専で当たり前であり、立命館が特殊だつたわけではない。戦前期立命館の特色として、中川総長が先頭に立つて禁衛隊を結成し、とくに戦時体制下で国体学・国防学を高唱し、学科名に東亜を乱用したことは否定できない。だが中川は、他大学が敬遠した左翼思想前歴者をふところ深く入学させた。旧制姫路高校を退学処分にあつた宮崎辰雄（のち神戸市長）や松本高校で退学処分となつた宮内裕（のち京大教授）はその顕著な例だが、ほかにも例があつたのではないかと思われる。戦前、戦中期にかけての日本の文化・社会・政治の動向はけつして「右翼」化の一語で片づけえない複雑な内容をかかえていた。私たちはその全容をとらえて、その中での立命館学園に目をむける必要がある。

なお一九三八年に立命館大学法学院部教授大岩誠（政治学）が留学中のフランス共産党との関係とその後の「世界文化」等での言論活動のために検挙され、辞職した。大岩は京大事件（滝川事件）で京大助教授を辞職し、立命に移つた一人である。辞職若手の最左翼だつたようである⁽¹³⁾。検挙後の自供で関係者たちに迷惑をかけたために、筆者の経験では戦後に「世界文化」関係者らの評判が悪く、そのせいか戦後京都での活動の形跡がない。晩年は名古屋の南山大学教授として終つた。

「国際問題研究」出版は誇り

京都の人民戦線運動として弾圧された「世界文化」や「学生評論」には、立命館大学の教員たちがすくなく執筆、協力している。薦田久規、田中直吉、加古祐二郎、淵定らをあげることができる。また田中直吉（政治史）、大淵仁右衛門（国際公法）、高橋良三（社会思想史）ら少社教授が国際問題研究会の名で「国際問題研究」（一九三六年）、「国際問題研究」（一九三七年）⁽¹⁴⁾の二冊を立命館出版部から刊行している。両者の内容は基本的にはいえば「世界文化」の立脚点に立つてヨーロッパ情勢、「日ソ関係」、「北支問題」を縦横に解説、論評したものであり、最後の田中直吉論文にいたつては「軍事的半農奴制的資本主義」⁽¹⁵⁾の性質の正しい理解が日本外交を把握する「鍵」であると述べている。これらは勿論学術論文であつて、それ自体を社会運動とすることはできないであろう。二巻の出た一月後には廬溝橋事件が起きている。きびしい言語統制の下で「国際問題研究」は、まるで「いたちの最後屁」のような胸のすぐ正論をのこした。急速に高まりつつあつた「日ソ」「北支問題」の緊張を前にして、廬溝橋事件の直前にこのようない記憶に値する論文集が立命館学園から出たことは、誇りとしてよいことである。田中直吉はこの数年後に石原莞爾の東亜連盟に参加するにいたつたためか、それに先づ貴重な労作が無視されてきたことは、残念である。

注

(1) 部瀬徹編著「京都地方労働運動史」三月書房 一九五九年、京都府議会「京都府議会歴代議員録」一九六一年。

(2) 小柳津恒「戦時下一教師の獄中記」未来社「九九一年。
（3）前掲「京都地方労働運動史」京都府議会歴代議員録。

(4) 北牧孝三「私の思い出」（戦前）京都の民主運動史を語る会「燎原」四二号 一九八三年。

(5) 川勝傳著「後藤靖編『激動の時代を生きる』東洋経済新報社 一九八七年。

(6) 「或る後輩への一文」「立命館学園新聞」七四二号 一九五一年。

(7) 田村敬男編「或る生きざまの軌跡」一九八〇年。

(8) 前掲「京都地方労働運動史」。

(9) 小沼陽子「学生と総長室」末川博先生追悼文集編集委員会「追想 末川博」有斐閣一九七九年。

(10) 「近代日本社会運動史人物大事典」日本アソシエーション 一九九七年。

(11) 「思想月報」昭和一六年八月分、昭和一二年十一月分。

(12) 二六会編「滝川事件以後の京大の学生運動」第一集 西田書店 一九八八年。

(13) 「佐伯千恵先生に『京大事件』を聞く」「立命館百年史紀要」第五号 一九九七年。

(14) 立命館百年史編纂室所蔵。

(15) この学術的規定の提唱者である山田盛太郎・平野義太郎が「コムアカデミー」事件で逮捕されたのは一九三六年だった。田中の論文はその後にもなおこの規定を公然と支持した例として記憶にとどめる必要がある。

8月5日から「京都の戦争展」第28回平和のための京都の戦争展（同実行委員会主催）が8月5日（火）から10日（日）まで立命館大学国際平和ミュージアム・中野記念ホールで開かれる。会期中、連日多彩な文化企画が準備されているが、7日午後3時からは「遺族が語る戦争体験」が、また10日正午から混声合唱組曲「悪魔の飽食」も演奏される。その他、国策紙芝居の再演、人形劇「猫は生きている」や、ミニシンポ、映画「武器なき斗い」上映や講演などがある。

□ ■

西口克己「廓」9月に伏見で上演 伏見の作家・西口克己氏が亡くなつて22年、その代表作「廓」が初めて劇化され、9月13日（土）の2時と6時30分、14日（日）2時の3回、地元伏見の呉竹文化センター（京阪・近鉄丹波橋駅西口）で上演の運びとなつた。尾川原和雄脚本、藤沢薰演出で副題は「つむじ風吹くまち」プロローグとエピローグのある二幕。主催は「上演を成功させる会」（電話075・647・0048）。前売り券3500円。

■ □

表現の自由が危ない文化フォーラム 政治家・企業が特定のジャーナリスト、個人を狙い撃ちする「口封じ訴訟」が横行し、自由な報道が脅かされてきている。関西のマスコミ関連労組が主催して7月26日（土）午後2時から京

都新聞文化ホールで山田厚史（朝日新

情報スクラップ



『封印されたヒロシマ・ナガサキ』

米核実験と民間防衛計画

高橋博子著 凱風社刊

「綜合原爆展」を詳しく紹介

一九五一年七月に京都駅前の旧丸物百貨店で「綜合原爆展」が十日間にわたって同学会主催で行われた。この「綜合原爆展」のことを、本書では「原爆という兵器のしくみからその投下結果まで一般市民に向けて総合的に紹介した、世界で初めての展覧会であった」と指摘して、展示内容や、経過などを詳しく紹介してください。当時の関係者の一人として、うれしい限りである。

当時の京大では、百貨店での展示に向けて、各学部の特色を生かした表現で、広島・長崎の被害の実情を訴える展示を二ヶ月足らずの短期間で作り上げた。並行して何組ものスチール展をつくり、市内府下の職場や学校、公会堂などで「綜合原爆展」の宣伝を行つていった。これらの展示では、それまでの兵器になかった原爆の二つの特徴として、大量破壊・殺戮の性能と放射線の恐ろしさとを強く告発していた。百貨店では、丸木位里、赤松俊子両氏の『原爆の図』五部作が同時に展示され、見る人を圧倒している。

ところが同じ時期に、連邦民間防衛局主催で全米を巡回した大型展示「アラート・アメリカ巡回展示」があ

た。期間中三万人の観客があった。原爆展を巡る当時の動きは「占領下の原爆展—平和を追い求めた青春」(小畠哲雄著、かもがわ出版社)に詳しい。

民の運動であつたからだと指摘している。放射線の毒性は、原爆の製造中からアメリカ政府は充分知りうる立場にいた。しかしそれを市民に知らせないのが原爆開発以来のアメリカ政府の政策であつた。そのことを

米政府解禁文書などで丁寧に追跡した著者は、まさに「ヒロシマ・ナガサキ」が封印されてきたのだと本書で告発している。(285頁、定価3000円+税)



◆かもがわ出版社「占領下の原爆展」(小畠哲雄著)の3刷がこのほど発売されました。630円(税込み)。注文は書店または、かもがわ出版まで。

憲法9条京都の会発足のついでが6月29日午後、シルクホールで開かれた。超満員の参加者を前に鶴見俊輔氏は「一人一人が自らのタコツボから離れることなく、世の中の動きを自分の感性でとらえながら行動して行こう」と訴えるとともに、米占領下、京大生らが京都のデパートで開いた「原爆展」について「日本思想史上の誇りだ」と高く評価された。

「戦争にはいのちをかけても反対せねば」という瀬戸内寂聴さんの熱い言葉も聴衆の胸に響いた。梅原猛、有馬頼底、安斎育郎、茂山千之丞氏もふくめ6人が代表世話を選ばれた。これを機に大きく運動を広げたいものである。

直後の放射線さえ避ければ、恐ろしいことはないという立場で展示は構成されていた。

8月21日から京都で教研集会 全教など実行委員会主催「みんなで21世紀の未来をひらく教育のつどい」教育研究全国集会」が、8月21日から24日まで京都市内で開かれる。21日午後の開会全体集会には井上ひさし氏が記念講演、22・23日は教科別・課題別分科会が29会場で。24日は「貧困と格差拡大で子どもたちは」など8会場で教育フォーラムが開かれる。参加協力券・詳細は京教組(752-0011)などへ。

聞記者)、鳥賀陽弘道(音楽ライター)らを迎えて開く。

忘れ得ぬ人

倉岡愛穂先生

神戸市御影警察に於て取調中に絞めらるゝに京都東山京都解放運動戦士の碑中に合祀さる

田弘道や下村鋼三が「新興教育兵庫支局」を結成した。窪田先生の倉岡評価は次のようにあつた。

「倉岡先生は常に我々のリーダーであつた。謹厳誠実。大声張り上げず生徒を叱責せず。それでもクラスの平均点はいつもトップ。先生の八畳と六畳の部屋にはいっぱいの蔵書、個人でんなに多くの蔵書を持つ人は知らない。先生は常に私たちにしゃべらせた。

以下残されている資料によりながら

小谷正一郎（京丹後市大宮町）

民主的学級づくりを心がけ

以下残されている資料によりながら

虐殺された郷土丹後の大先輩

一九三七年（昭和二年）四月九日、

平和を愛し戦争に反対して、真理と自由を追求する教育を貫いた一人の教師が、警察署の一室で虐殺された。

山本宣治暗殺から八年、小林多喜二

虐殺から四年、そして日本軍國主義の国家権力が日華事変へつつ走る直前の、国民にとつてはまことに暗い受難の時代であった。

過日、機会を得て私はこの偉大な大先輩の墓参をすることことができた。

先生の生家は、宇川鞍内の中腹に残っているが、すでに住む人はなく空家となつていている。幸い当時は親戚筋にあられる元教員の倉岡正二先生（網野在住）がおられて、親切に御案内頂くことができた。

小高い丘の中腹に位置する墓地は草に覆われていたが、仲が良かつたといわれる三人の御兄弟の御影石の石碑が、きちんと並んで建てられていた。先生のお墓は仏式ではなく神式であるため、戒名ではなく生前のお名前が彫



倉岡愛穂（左）と兄弟並んだ墓碑



兵庫県では一九三二年（昭和七年）神戸市二葉小学校で「チヨンガーハ」という学習サーク

京都では一九三一年（昭和六年）室町校にいた丹後出身の安達征一と侍鳳校の亀岡出身の人見亨や川西勇等を中心に「京都支局」が結成された。この人々は結成後一齊に弾圧を受け三人は不当にも教職を追放された。

一九三六年（昭和一年）一二月五日倉岡先生は突如、兵庫県御影警察署に検挙された。続いて一二月一八日同僚の窪田先生夫妻が芦屋署へ、下村先生が御影署へそれぞれ検挙された。

これが一九三六年（昭和一年）から三七年（昭和二年）にかけてのいわゆる「人民戦線事件」である。全国的に一〇〇〇人以上の学者文化人が検挙された。

倉岡先生は一九三七年（昭和二二年）四月九日兵庫県御影警察署の一室で拷問のため絞殺された。警察は家族に「変死したから死体を受け取れ」と連絡してきた。かけつけた家族が、そこに見たのは無残な倉岡先生の亡骸であった。警察は「倉岡は、ワイシャツのカフスボタンのところを結び合わせて首つり自殺を図った」という。家族が調べると、首には絞められた後が残っていた。さらにおかしいことには死後十時間もたつていていた。そして、警察が家族に申し渡したのは、（一）医者に見せるな（二）葬式を出すな（三）死亡通知をするな、という冷酷なものであった。

これは明らかに警察による拷問死の隠蔽ではないか。倉岡先生の兄弟たちが悲憤慷慨血涙を流した。

警察に抗議する「経歴書」

倉岡先生の仲の良かった兄弟は、警察に禁止された「死亡通知」のかわりに次のような「経歴書」を関係者に配っている。

倉岡愛穂の略歴
明治二十八年二月九日、京都府竹野郡上宇川村字鞍内、農戸主九左衛門ノ一男ニ生マレ
一、京都師範一部卒業、大正五年、十二歳
一、竹野郡中浜小学校訓導、自大正五年至大正十一年

一、間人小学校訓導、大正十一年、二十七歳

一、虎杖小学校校長、大正十二年、二十八歳

一、神戸市御影小学校訓導、自大正十三年、至昭和九年、二十九歳、三十九歳、三十九歳

一、神戸市二葉小学校訓導、自昭和九年、至昭和十二年、三十九歳、四十二歳

昭和十一年十二月二十三日、思想嫌疑犯トシテ兵庫県御影警察署ニ留置セラレ御影警察署長御前一男ガ自ラ調べテキタ。御影警察署ニ留置セラレテカラ百六十日目、即チ昭和十二年四月九日「御影警察署内デ変死シタカラ死体ヲ受け取レ」ト、生島検事ガ申シタノハ凶変後十時間位モタツテカラノコトデアツタ。

少時カラ性温厚、学ラ好ミ、父ニ事ハエ孝養克ク力メ兄弟友人ト交リテハ親和ノ誠ヲ尽クシ、徳行範ヲ自ラ垂レ、時二人愛慕スルトコロデアツタ。漸ク熟シテ未タ思想蘊蓄ヲ發表スル機会ナク切歎憤激シツツ御影警察署内悲愴、憤懣ニ耐ヘズ。

愛穂ノ思想内容ハ穩健中正、常ニ國家大衆ノ味方デアツタコトハ其ノ生前、足跡ニ歴然トシテキル。思想矯激ト考ヘタルハ餘リニモ其ノ無学低級、頑冥ナノヲ痛恨スルトコロ、事後ノ処置ニ対シテモ、餘リニモ其ノ冷酷：近

アリマス。
茲ニ懇意流涕シツツ死亡ノ御報ヲ致シマシタル深淵ナ御厚情ヲ衷心感謝致シ上ゲマス。尚、故人最終ノ儀ヲ揚ゲマス冥福ヲ祈リ下サルコトヲ得マスレバ随喜スルトコロデアリマス。

昭和十二年四月九日（一九三七）四二歳
姫路市北条口一〇二兄倉岡瑞穂
神戸市灘区篠原南町七丁目五四五
以上ふりかえって、当時の状況の厳しさ、権力の冷酷・非道をあらためて認識すると同時に、それに屈しない倉岡先生の凜然とした生き方、そしてその生き方を断乎として支持し、共に生きようとした二人の御兄弟の深い兄弟愛を痛感するのである。

そして、倉岡先生が残された貴重な体験を、今あらためて教訓として胸に刻みたいものである。

紙芝居「祇園祭」半世紀ぶり再演

1952年に京都大学の学生らが作り、京都や東京などで実演した紙芝居「祇園祭」は「国民的歴史学運動」の代表的成果として知られていますが、このほど「戦後歴史学ワーキンググループ」（田中聰代表・立命館大学）が絵やスライド写真を発見、復元して半世紀ぶりに7月13日午後1時半から烏丸御池上ルの登録会館大ホールで上演します。主催は日本史研究会・京都民科歴史部会。

京都大生が1950年代、民主主義の大切さを訴えようと上演した紙芝居「祇園祭」の絵などが見つかり、7月の祇園祭にあわせ、京大生らのサークル「紙芝居研究会」が半世紀ぶりに再演する。

民主主義の大切さ訴えた

紙芝居「祇園祭」

発見した研究者組織
「戦後歴史学ワーキンググループ」（京都
市）によると、審時
代末期の十六世紀、祇
園祭の山鉾巡行が止
められようとする武士
衆が力を合わせて再
興する物語。絵は豊
かな水彩画で構成され
る。六八年公開の映
画「祇園祭」（山内鉄
也監督）の原作でもな
った。

京大で発見、復元

半世紀ぶり7月に再演

てつくる「祇園祭」が故林屋辰三郎が給や物語を制作。表は、学生たちが民主主義を訴えていた時代の雰囲気が分かれる貴重な資料。再演

会員と賛助会員の拡大など方針

一〇〇八年度 総会開く

6月13日（金）午後、市職員会館かもがわ会議室で京都の民主運動史を語る会2008年度総会がひらかれた。34人が出席しました。

第1部は松尾尊児・京都大学名誉教授が「京都の自由主義者 佐々木惣一——敗戦前後を中心に」と題して2時間にわたり講演、とくに敗戦前夜、高松宮・近衛グループの終戦工作への関与、戦後の近衛の憲法改正作業への協力と佐々木案の進歩性について述べ、佐々木が戦前戦後、市民的自由と政治的自由を貫いて追求、戦後民主主義は大正デモクラシーの延長ではないが受け皿となりえたと結びました。（写真）

民主運動史を語る会例会案内

8月28日（木）午後2時～

かもがわサロン

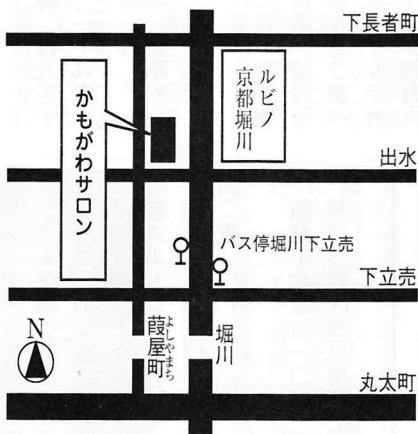
上京区堀川通出水西入

☎075-415-7902

「私のレッドページ」

語る人 早見栄子さん（劇団京芸）

1950年9月25日、大映京都をページされた22人のうちの1人。そのときの様子、そしてたたかい、苦労しながらも俳優の道を歩み続けたその後の人生も語っていただきます。



例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料、会員外の方は300円。



た。閉会しまし
た。あいさつで
表世話人の
（前回と同
じ）、岩井代
と会務報告
を承認した
あと、世話
人を選出
案しました。
ついてのお
願い」を出
すことと提
案しました。

2008年度 総会次第

会務報告

現在の会員数191名（昨年度185名）。

会報

170号～175号の発行（171号から12頁で発行）

例会（前回総会以降）隔月開催（8月は休会）

10月11日 15年戦争期の抵抗運動の一面—布施杜生を中心(3) 岩井代表世話人

12月14日 レッドページの思い出(4) 河本清さん

2月29日 伏見・洛南の革新の伝統を語る(5) 砂川良昭さん

4月25日 京大学生結核研究会事件（1942年）の生き証人を訪ねて 家野貞夫さん(6)

世話を中心に、湯浅貞夫さんの所蔵資料の整理を開始。
選出された世話人

稻田達夫・岩井忠熊・奥村和郎・小田切明徳・川合葉子・黒住嘉輝・田北亮介・藤井舒之・堀江八郎・馬原郁・湯浅俊彦・井手幸喜

代表世話人 岩井忠熊

編集担当—湯浅俊彦 会務担当—井手幸喜

例会担当—小田切明徳

会計監査—蓮佛 亨 編集協力—須田 稔

2006年度収支一覧表 2007年4月1日～2008年3月31日

収入項目	収入金額	支出項目	支出金額
前期繰越	276,002	会報印刷	514,500
会費収入	465,000	(170号～175号)	13,110
カンパ収入	60,000	編集	120,091
雑収入	3,500	発送	18,736
		事務	14,500
収入合計	804,502	例会	680,937
		支出合計	123,565
合計	804,502	現在高（貯金）	
		合計	804,502

会計監査報告

2008年6月3日

会の会計について関係帳簿類を精査した結果、いずれも正しく処理されていることを認めます。

蓮佛 亨 印